

シラチャ日本人学校における進路指導と実践

前泰日協会学校シラチャ校（シラチャ日本人学校） 教諭
徳島県鳴門市鳴門中学校 教諭 志 磨 智恵子

キーワード：在外教育施設、タイ、シラチャ、進路指導、入試対策

1. はじめに

平成28年度より3年間、泰日協会学校シラチャ校（シラチャ日本人学校）に3年間赴任した。中学部に在籍し、1年目は2年生担任、2年目・3年目の2年間は3年生担任という立場で、生徒の進路指導に携わった。シラチャ日本人学校は2009年に開校した新しい日本人学校であり、中学部3年生の進路実績が少ないため、中学部の卒業生を1人でも多く増やすことが毎年度の目的のひとつとなっている。そして、これまで中学部に在籍されてきた先生方のご尽力が実り、2017年度に初めて2桁台となる17名の卒業生が、翌2018年度は21名がシラチャ日本人学校を巣立っていった。

シラチャ日本人学校は、進路指導担当の教員と担任を中心に、中学部全体で進路指導を行っている。姉妹校であるバンコク日本人学校の協力も得ながら、生徒と保護者の方々とともに、生徒にとってもっとも良い進路選択になるよう取り組んだ。ここにその内容を紹介したい。

2. シラチャ日本人学校中学部の概要

シラチャ日本人学校の児童生徒数は、小学部が約400人、中学部は約80人である。中学部は学年によって異なるが、1クラス20～30人程度で、学年に1クラスずつである。高学年になるほど生徒数は減少する傾向にあるが、先に述べたように、近年は中学3年生が20名程度在籍している。転出入は年度によって異なるが、小学部卒業時に日本の中学に進学するため本帰国するケースや、保護者の長期滞在が決定している場合は、途中でインターナショナルスクールに編入するケースがある。小学部からずっと在籍している生徒はさほど多くないのが現状である。

3. 生徒の進路

(1) 志望校の選択

日本人学校に在籍する生徒のほとんどは、志望校を決定する際の判断材料として、保護者の仕事の都合が大きなウエイトを占める。家族全員で暮らす場合や、保護者が単身赴任となる場合、生徒が寮で生活する場合、国内に住む祖父母と一緒に暮らす場合など、さまざまなパターンを想定して考えなければならない。弟妹のことも同時に考える必要もあり、中学1年生から具体的な進路指導や相談が始まる。

中学3年生のうち、ほとんどの生徒はシラチャ日本人学校卒業と同時に日本へ本帰国する。帰国生枠を利用した私立高校の専願受験が多いが、公立高校を第一志望とする生徒も少しずつ増えている。インターナショナルスクールに編入する場合は、9月始まりに合わせて1学期でシラチャ日本人学校を去る場合が多い。

(2) 受験方法の選択

海外に住んでいるから高校入試は不利だと不安に思う生徒や保護者がいるが、決してそうではない。海外在住の年数によっては、受験方法が増える場合や受験教科が絞り込まれる場合がある。それらを大いに利用して、少しでも有利に進めることができるのは、日本人学校ならではの強みである。私立高校が中心となるが、海外を会場として行われる海外入試や、各高校で定めた選考基準に合致する生徒を対象とした帰国生入試がある。帰国生入試の中でも、選考基準で多く設けられているのが、英検などの外国語能力を問うものである。シラチャ日本人学校

の生徒は英語の学習に熱心であり、英検準2級～2級を取得する生徒も数名いた。高校側が求める英語力もそれとほぼ同等であるため、年3回の英検受験のチャンスを大切にしている。

また、公立高校でも帰国生を対象とした措置を採用する都道府県も増えている。ただし、海外在住年数を2年以上とする条件や、保護者とともに住民票をその都道府県内に移す条件、提出書類の手続きの煩雑さなどの条件がある。条件に見合う公立高校があれば、第一志望として考慮する生徒や保護者が増加する傾向にある。

(3) 受験の準備

受験に向けて、事務的なやり取りの上で思ったことは、時差と距離感である。タイは日本よりマイナス2時間の時差であり、日本の高校に電話等で問い合わせる場合、都合を合わせる苦労はほぼなかった。必要書類を取り寄せたり発送したりする場合も、航空便なら数日で確実に届くという国内事情もありがたかった。入試要項は、私立・公立問わずホームページで公開されており、メールでの問い合わせも可能であるため、情報の収集がとてもしやすかった。タイは電力・通信とも安定した供給がなされており、環境的に恵まれている状況であると思う。

注意すべき点は、公立高校の受験である。都道府県外からの受験については、事前に受験許可の申請や資格が必要な場合がほとんどであり、その書類の作成や提出のために、保護者が帰国して直接申請しなければならないところもある。夏休み前後に入試要項がホームページで公開されるところが多いので、更新されているかを毎日のようにチェックする必要がある。

4. 進路指導の取り組み

シラチャ日本人学校では、年に3回の長期休みを利用して一時帰国する家庭がほとんどであり、その際に高校を見学したり情報を収集したりして進路選択の参考とする生徒が多い。特に高校見学は、ホームページやパンフレットでは伝わりにくい、高校の雰囲気や直接味わうことができる貴重な機会である。限られた休みを有効活用してもらいたいため、進路指導は中学1年生から行い、先を見通した学校生活や進路選択を呼びかけている。以下、シラチャ日本人学校の取り組みを紹介する。

(1) 進路説明会

3年生向けは4月と9月に実施。1・2年生向けは1学期、2学期の年2回実施した。生徒と保護者は希望者のみの参加であるが、今年度から生徒は全員参加としたようである。1年間の進路スケジュール資料をもとに、日本の中学校よりも2～3ヶ月早い準備が必要であることを知ってもらい、見通しをもった取り組みを行ってもらうためである。いつ頃にどんな動きをするとよいか、細かく説明を行い、それぞれの状況に合った受験方法を選択できるようにする。

(2) 高校説明会

日本や海外にある高校の先生が来校して行われる学校説明会は、例年5月頃～7月頃まで随時開催される。複数の高校が合同で開催する合同説明会もあり、今年度は中学1年生から3年生まで全員参加して実施されたようである。保護者も参加し、個別で質問をすることもできる。高校生活や寮のこと、卒業生の進路実績など、生の情報を得ることができる貴重な機会であり、中学1・2年生にとっても、進路選択を意識する良い機会となっている。

(3) 実力テスト

シラチャ日本人学校では、中学3年生は年3回の実力テストを実施している。日本全国の公立・私立高校をカバーする業者テストを取り入れているが、塾に通う生徒の中には、各地域で実施されている模試などを各自で受ける者もいた。実力テストの判定をもとに面談を行い、進路選択の材料とした。

(4) 卒業生に聞く会

10月に、シラチャ日本人学校を卒業した生徒（高校1年生）とインターネット電話を通じて、インタビュー形式で高校生活や受験勉強などの話を伺う機会を設けた。海外に住んでいると、高校生の姿や生活の様子を知ることができないため、高校生という存在が身近に感じられず、高校生活を想像するのが難しいとの声を、以前より生徒や保護者からよくいただいていた。その思いを解消するべく、前年度に初めて実施することができた。高校生活のこと、勉強と部活の両立、中学校と高校の違い、中学生のうちにやっておくべきこと、環境の変化、高校に入ってよかったこと、などの質問に対して、卒業生2名の協力を得て、生の声を聞くことができた。仲が良かった先輩の現在の姿を見ることができて、生徒の感想は上々であった。

(5) 進路相談室

空き教室を利用して、進路関係の本や高校のパフレット、日本全国の公立高校入試過去問題の冊子などを置いて、自由に閲覧できるようにしていた。卒業生から寄付された入試関係の冊子なども置いてあり、貸し出しも行っている。

5. 終わりに

進路選択については、生徒本人の努力はもちろんのこと、保護者の協力がとても大きかったと感じた。情報収集、日本にいる親戚や友人との連携、高校見学、高校とのやり取りなど、多岐にわたる受験への取り組みにおいて、家庭が中心となって行うため、保護者のご理解とご協力がなければ、生徒も学校側も受験を乗り越えることができなかつたと思う。また、先述の通り、これまでシラチャ日本人学校中学部の実績を積み上げてくださった先生方のお力も大きかった。

不便であり、不安でもある海外からの受験を避けるため、中学2年生の終わりに日本へ転出する生徒も毎年多くいる。それでも中学3年生の終わりまで在籍し、卒業していく生徒が徐々に増えているのはなぜなのか。ある日、生徒が理由を教えてくれた。「シラチャが好きであり、シラチャ日本人学校を卒業したいと思う気持ちがあるから」ということであった。その強い思いに応えるべく、進路指導担当の先生を中心として、シラチャ日本人学校の教員が一丸となり、進路指導に取り組めたことに深く感謝したい。

在外教育施設は規模や地域、環境は異なるが、生徒が自分の可能性を伸ばし、すばらしい将来を描けるよう、進路指導を行っていくことは共通して大切なことである。この資料が少しでも参考になれば幸いである。